

# 明治天皇のイメージに関する一考察

——ドナルド・キーン『明治天皇』を中心に——

劉 玥揚\*、郭 連友\*\*、吳 光輝\*\*\*

## 1. はじめに

ドナルド・キーンによる評伝『明治天皇』は、「ライフワーク」であるだろうと思われた『日本文学史』が仕上がった後に構想された<sup>1</sup>。「私の頭に閃いたのは、明治天皇が日本の天皇の中で一番偉大な君主として賞賛されているにもかかわらず、英語で彼の伝記がないことだった。日本語で書かれた伝記も、ほとんどないに等しかった。明治天皇は、確かに伝記をかくに値した」<sup>2</sup>、とキーンは初めて日本人の伝記を書くことを思い立った心境を、『ドナルド・キーン自伝』に残している。さらに、明治時代の政治家、文化人、軍人などに関する綿密な研究が十分あるのに対して、近代日本にとって最も重要な人物・明治天皇が欧米でなぜ黙殺されているという不思議ともいべき現象が<sup>3</sup>、キーンのもう一つのライフワーク『明治天皇』創作の契機となった。

評伝『明治天皇』に関する有名な逸話が残っている。明治天皇を対象に評伝を書くに決めた際に、友人である作家安部公房から、書けば右翼から脅迫に遭うだろうとキーンは忠告された。しかし脅迫覚悟で書いてみれば、結局どこからも脅迫されず逆に意気消沈したという。しかしなぜキーンは脅迫に遭うと思っていたのか。そしてなぜ『明治天皇』は右翼から脅迫されなかったのか。脅迫されるはずだった『明治天皇』は一体どのような明

治天皇像を作り出したのか。本稿は及ばずながらキーンの作り出した明治天皇のイメージを分析する。

## 2. 明治天皇の一般的なイメージとその集会的記憶

明治天皇のイメージは、時に曖昧で具体的な印象に欠けるように思われる。日本、海外を問わず、明治天皇が日本史上最も偉大な統治者である、と漠然と信じる者は大勢いる。しかし面白いことに、明治天皇という人物についての具体的な知識は、その45年にわたる治世の中の輝かしい業績一つを思い起こすのにも苦勞するほど不足している。公式記録である『明治天皇紀』をはじめ、各種資料が十分に揃っているにもかかわらず、明治天皇という人物に関する一般的な知識は不足しているというのが現状である。

また、明治天皇のイメージは現代において断片化され、絶えず再構築されている。明治天皇という人物から連想されるのは、一般的に軍服姿の御真影、明治維新並びに明治という激動の時代、或いは「五箇条の御誓文」、「教育勅語」など、断片化された数々のキーワードでしかない。これらのキーワードは、明治天皇に関する集会的記憶の具象化である。過去は現在の観点から絶えず再構成され続けるというアルヴァックスの集会的記憶論に基づいて考えるならば、明治天皇のイメージ（集会的記憶）も、現在の観点から絶えず再構成され続けるということになるが、現代において

\* 北京外国語大学北京日文学研究センター院生

\*\* 北京外国語大学教授

\*\*\* 厦門大学教授

再構成されたそのイメージは必ずしも真実の明治天皇像に近いというものではない。例を挙げて言えば、明治天皇といえば真っ先に引き合いに出される「軍人勅諭」や「教育勅語」など詔勅の類は、実際には天皇以外の人物の手によるものであり、その言葉遣いの中に明治天皇個人の考えを見つけるのは難しい<sup>4</sup>。さらに、未だに明治天皇は日清、日露の戦争の勝利や日英同盟の締結とともに、日本を列強と肩を並べる近代国家へと導いた英雄的な役割によって一般的に記憶されることが多いが、事実として、これらの出来事に際しての天皇の役割は、さほど大きなものではなく、政策や戦略の実際的な立案者というよりは仁慈ある傍観者であったに過ぎない<sup>5</sup>。

このように、明治天皇に関する事実と再構成されたイメージ（集合的記憶）の間には、認識にズレがあり、断層が存在している。人々は天皇を一つの集合的記憶として記憶し、それを忘れることこそはないが、日本人の多くは紛れもなく天皇の功績について具体的な知識を持ち合わせていない。

### 3. 歴史における明治天皇のイメージ

明治天皇の治世の始まる明治元年（1868年）より現在に至るまで、およそ150年にわたる長い歴史の中で、明治天皇のイメージは絶えず再構築されている。

#### 3.1 日本人が語る明治天皇

明治天皇を語る文献として主に公式記録、回想録、伝記、論評などがある。特に、宮内庁が編纂した完璧に整理された一万ページの公式記録『明治天皇紀』は、何年何月何日に明治天皇が何をしたか、誰と会ったか、周辺で何が起こったかなど、年代順に1日単位で事細かに書かれており<sup>6</sup>、明治天皇や明治時代の歴史を研究するための基本文献として活用されているが、そこから天皇の真情を知ることはできない。また、「明治聖天子」と題する雑誌「太陽」臨時増刊号が明治天皇の死の

直後出版され、天皇を最もよく知る人々が、天皇の簡素を旨とする信条、天皇の並外れた記憶力、天皇の他人に対する思いやりなどについて語ったが、どういうわけか明治天皇という人物を詳細に彫り出すまでにはは到っていない<sup>7</sup>。侍従たちの回想録も、明治天皇について詳しく語っているが、彼らの思い出話は、場合によっては実に些細であり、それぞれの内容が矛盾していることも多く情報が交錯しているため<sup>8</sup>、天皇が実際にどういう人物であったのかということの回想録から見極めるのは難しい<sup>9</sup>。

明治天皇に関する伝記作品、批評作品は数え切れないほどあるが、そのほとんどの作品が、或いは様々な逸話を持ち出しながら、「人間的」側面を持つ明治天皇のイメージを作り出すことに力を費やし、或いは明治天皇の存在を数々の功績に値しない「無」の存在として、また或いは臣民の幸福に無関心である冷酷無比な暴君として明治天皇のイメージを構築している。膨大な数の作品の中で、「明治天皇という一人の人物の信用できる肖像を書き出すことに成功した作者は残念ながら皆無に近い」<sup>10</sup>とキーンは語る。

#### 3.2 西洋人が語る明治天皇

西洋人を引見した最初の天皇として、明治天皇は日本を訪問した外交官たちの日記にも登場する。天皇と直に会うことの出来た日本人の文章ほどは抑制が利いてない彼らの記述は、初めて公衆の前に姿を現した天皇の姿を率直に語っていて極めて興味深い<sup>11</sup>。治世初期の明治天皇を見た西洋人は、まずその顔に驚いた。日本の天皇を間近で見た最初の外国人の一人であるミッドフォードの回想録によれば、明治天皇は白粉を塗り、赤と金の口紅を塗り、頬には紅をさし、眉を剃った上に作り眉を書き、お歯黒をしていた<sup>12</sup>。また、当時の天皇の立ち振る舞いの様子についても、「明治天皇はまだ極めて年若」<sup>13</sup>な上に、「少しはにかんでいるように見えた」<sup>14</sup>と記録を残している。当時通訳官であったサトウも、「ハリー卿が進み出て、

イギリス女王の書簡をミカドに捧げた。ミカドは恥ずかしがって、おずおずしているように見えた。(中略) また、陛下は自分の述べる言葉が思い出せず、左手の人から一言聞いて、どうやら最初の一節を発音することが出来た<sup>15</sup>とまだ十分慣れていない状況に直面した若き君主の神経過敏な心の様子を伝えている。

天皇には、自分が日本の天皇であるということ、そしてその重大な責任について十分な覚悟があった。そのことが当時の外国の批評家に深い感銘を与え、彼らはヨーロッパの君主と比較する上で常に明治天皇に好意的だった<sup>16</sup>。明治15年、チャールズ・ランマンは明治天皇を「偏見から自由で、国家の繁栄の増進に有益と思われるあらゆるものを外国から採り入れる熱意ある向上心の持ち主」と称え、ピョートル大帝に驚くほど似ていると明言している<sup>17</sup>。

西洋人が語る明治天皇の記録は、天皇が君主として成長していく軌跡を明らかにしてくれる。天皇の「友人」であるグラント将軍、密談を持ちかけたハワイのカラウア王、天津にて襲撃されたロシア皇太子など数多くの訪問者が明治天皇を賛美し、君主として高く評価していることが示しているように、天皇は彼を訪ねる者たちに深い感銘を与える堂々とした人物に成長していった。明治天皇の死後、世界中の新聞に天皇を称える哀悼の評論が掲載され、各国の論評は一律に賛美の言葉に満ちていた。

#### 4. ドナルド・キーンによる明治天皇イメージの再構築

評伝『明治天皇』は、明治天皇の伝記を中心とした明治時代史である。キーンは明治天皇を描くため明治という時代そのものを読み解き、「何世紀にもわたって西洋との接触をほとんどすべて拒否した国に生まれながら、その国が世界の列強の一つへと変貌を遂げていくばかりでなく国際社会

を形成する一国として成長していく姿を生涯を通じて見守ってきた一人の人物——明治天皇を発見する<sup>18</sup>こと——つまり明治天皇のイメージの再構築にその焦点を当てた。本稿ではキーンによる明治天皇イメージの再構築を、人間としての明治天皇、明治大帝としての明治天皇、現人神としての明治天皇、と三つの側面にとらえ、その再構築の軌跡の分析を試みたい。

##### 4.1 人間としての明治天皇

伝記作者の務めは、その対象を人々の眼前に蘇らせることにある。しかし明治天皇は、間近に迫ろうとする伝記作者の試みを、ほとんどはねつけているかのように見える。キーンは最大限に明治天皇に近寄る努力をした。明治という時代を生きる明治天皇という個人に焦点をあて、幼少時代からの人生を丁寧にとどることによって、明治天皇はどのような性格を持ち、いろいろな節目においてどのような見方をし、どのような心理状態であったのか、などを探った<sup>19</sup>。大まかな描写ではなく、キーンは編年史的に毎週、時としては毎日の出来事を追いながら、天皇の全体像を描こうとした<sup>20</sup>。「人間」としての明治天皇を発見することは、明治天皇の肖像を描く第一歩であった。

人物像を膨らませるために、まずキーンは明治天皇の「人間的」側面に注目した。天皇の性格、暮らし振り、言葉遣い、天皇がどんな声で、どんな話ぶりだったかななどを丹念に考証したが、あまり効果的な結果は得られなかった。天皇にまつわる無数の伝説や逸話——例えば、大酒飲みであったことや、自分の健康に全く無関心で、医者が嫌いであったこと、女性関係についての噂話などは明治天皇という人物を知る上である程度の手がかりを与えてくれるが、しかしキーンに言わせればこれらの話は、他の無数の日本人と同じく天皇は酒を飲むのが好きだった、医者が嫌いだったなどという退屈な事実を提供したに過ぎず、この種の逸話のみを足がかりにして天皇の肖像を描き出すことはできない<sup>21</sup>。

「例えば天皇が御所から初めて外に出たのが正確にいつであるか、我々は知ることができる。しかし我々が本当に知りたいのはその刻限のことなどではないので、天皇がその世界の全てだった禁裏から出て外の空気に触れ、(例えば釈迦牟尼のように)生まれて初めて貧困や病気や死を目にした時、何を感じたかということである」<sup>22</sup>とキーンは語るが、しかし「天皇が何を感じたか」ということは資料には記録されていない。決まり手となる資料が欠落している場合、伝記作者は憶測する以外にそれを補う術を持たない。天皇を取り巻く大小数々の事件について、天皇の反応が記されていない部分を、「多分」や「おそらく」といった表現で補いながら、キーンは明治天皇の人物像を膨らませている。

しかし、天皇の「人間的」側面に近づくということは大変困難なことであり、評伝『明治天皇』を持ってしても、それを結論付けることはできなかった。しかし、キーンは「人間的」側面とは別の意味で「人間」という言葉を理解している。即ち、御簾の後ろに隠れた天皇の「人間化」のプロセスである。長い歴史の中で、天皇は側近くに仕える一握りの公家を除けば誰の目にも見えず、畏敬と尊敬の念を民衆に植え付けていたとしても、完全には人間世界に属しているとは言えない御簾の後ろの存在であった<sup>23</sup>。天皇が御所の奥深く隠された神秘的な存在から臣民に親しまれる目に見える存在へと変貌していく「人間化」の過程を理解することが、「人間」としての明治天皇を発見することにつながるとキーンは考えた。

天皇の「人間化」は近代化と密接に関わりあっている。近代国家としての明治日本を立ち上げるためには、天皇自身が目に見えない、非視覚的な日本の君主制を改めることが政治的に不可欠であった<sup>24</sup>。天皇を「人間化」しようとする試みは、天皇が臣民の前に姿を見せる巡幸、近代的君主として印象付けるための外見的变化から始まり、容姿を改め、民衆の前に姿を見せることで天皇

は、公人としての役割をはたすようになった。世間との交渉を絶って目に見えなかった御所の中の皇子から、目に見える存在として国家の不屈の支配者へと変貌を遂げた明治天皇は、神の末裔から近代君主という「人間」になった。そして、「剛毅木訥仁に近し」という言葉を使ってキーンが表す、意志が強く、容易に屈することなく、無欲で、飾り気がなく、孔子の理想である仁に近い君主像は<sup>25</sup>、日本国民にとって厳格かつ慈愛に満ちた父親像に一致した<sup>26</sup>。

#### 4.2 明治大帝としての明治天皇

「大帝」とは、立派な功績を残した皇帝を指す称号であり、英語の「the Great」に当たる。天皇の死の翌日、大阪毎日新聞の第一面に掲載された記事は、ピョートル大帝にならって故天皇を「ゼ、グレート」と呼んだ<sup>27</sup>。飛鳥井雅道は、自分の著書の題名を「明治大帝」とした理由を、「近代史の中で、いや日本史の中で、この天皇以外に大帝はいないからである。明治天皇は大帝たる足跡を確実に残した」<sup>28</sup>と説明している。キーンもまた、明治天皇を「大帝」と考えるに至った理由について、「明治天皇の伝記を書き始めた時、どのように書くか、私の中に決まった態度はありませんでした。しかし調べが進むに従って、明治天皇という人物に感心するようになる。そして最終的には、当時の皇帝の中で世界一の存在だった、ゆえに明治大帝といったほうがいいのではないかという結論に達したのです」<sup>29</sup>と述べている。

キーンが明治天皇を「大帝」と考える理由の一つは、在位が長かったことにある<sup>30</sup>。もし、天皇が若くして死ぬか、或いは父孝明天皇と同じわずか35歳で生涯を閉じるようなことになっていたとしたら、明治天皇は自らの気概を見せる機会に恵まれず、単に王政復古の時代に君臨した天皇として、かろうじて人々に記憶されることになったのではないだろうか、ということキーンは繰り返し強調している。はっきりと自分の意見すら言えなかった若者から、慈愛に満ちた畏敬されるべ

き近代国家の君主への成長は、明治天皇の在位の長さが前提となる。45年の長きにわたり天皇が徐々に築き上げてきた確固として不動の印象は、人々に畏怖を覚えさせるまでに神聖な威光を天皇に与えることとなった<sup>31</sup>。

さらに、天皇の権力は原則として絶対であったにもかかわらず、それを行使しようとしなかったことが、「大帝」たる最大の理由であるとキーンは考える<sup>32</sup>。総司令官であり、また大元帥であったにもかかわらず、明治天皇は一度も戦争の作戦に干渉したことはない<sup>33</sup>。ヨーロッパの皇帝たち——例えば、親族に便宜を図り、軍事的才能の全くない人物を極東総司令官にしたロシア皇帝ニコライ二世のように、国家の最高権力者がその権力を笠に着て横暴に振る舞うことは決して珍しいことではなかった<sup>34</sup>。しかし三軍の大元帥たる明治天皇は十分な権力を持ちながら、それを行使することは一度たりともなかったのである。事実、明治天皇は禁欲的であった。儒教の教育によって培われた義務の観念は、天皇を素朴で奢侈や誇示を嫌う個人の感情を減多に見せない公平無私な儒教的君主へと仕立て上げた。明治天皇は、天皇であることを特権としてではなく、責務として考えるようになっていた<sup>35</sup>。この強すぎる義務感は、明治天皇が受けた儒教教育のためとされてきたが、キーンはこの教育が、父である孝明天皇や一般の宮廷人たちが受けたものと本質的に同じものであったことを指摘する<sup>36</sup>。しかし同じ儒教的教育を受けたにもかかわらず、明治天皇だけが自らに厳しかった。明治天皇の君主としての禁欲的な使命感が自らの行動の規範を作り出し、その規範が怒りに身を任せることや、勝手気儘に無責任と思われる振る舞いに及ぶことを禁止させた。

「明治天皇の栄光は、その治世の長さ、天皇が日本国民に常に深い関心を払っていたこと、揺るぎない印象に由来するもの」<sup>37</sup>であり、「長命と強い使命感が、明治天皇をついには歴代の天皇の中で最も名高い天皇に仕立て上げることとなっ

たのだ」<sup>38</sup>とキーンは明治天皇が「大帝」にふさわしい理由を述べている。

### 4.3 現人神としての明治天皇

1912年に没した天皇には、諡号「明治」が送られた。天皇の諡号が年号から取られたのは、前例のないことであったが、「明治」という年号は、天皇自身とあまりに密接に結びついており、そのため、これに代わる適切な諡号はないように思われた<sup>39</sup>。

生涯を通じて国民の大多数によって偶像視された明治天皇は、過去に君臨した天皇の多くと違って、死後も人々の記憶から消え去ることはなかった。明治天皇は独自の特質を備えた一人の人間としてではなく、日本が得体の知れない東洋の君主国から列強諸国と肩を並べる近代国家へと変貌するにあたってその原動力となった存在としてでもなく、神格化された存在として神の座に祀られ、特にその名を冠した神社で拝礼を受ける存在として記憶されることとなった<sup>40</sup>。明治天皇は、その存在の形を変えて人々の記憶に生き続けているように見える。

しかしキーンは以下のことを指摘する。一つ、天皇の治世に生き、仕事をした日本人の数が着実に減少していく中で、明治は概して一つの名称となりがちであること<sup>41</sup>。二つ、天皇に仕えていた軍人や官吏の業績と、明治神宮に祀られ、正月には何百万という参拝者を迎える神格化された明治天皇の数々の業績は一般的に同一視され、天皇が人々に忘れられることはないにしても、日本人の多くは紛れもなく天皇の手柄に帰すべき功績一つでもあげるのに困難を覚えるということ<sup>42</sup>。三つ、京都にある明治天皇の陵墓は、概して人影もまばらであること<sup>43</sup>。そして、明治神宮は、新年が来るごとに日本の神社仏閣の中で最大多数の参拝者が足を運ぶ名所となっているが、その神社に参拝しながらそこに祀られている天皇のことを思い起こす人々は、ほんの一握りでしかなく、参拝者の多くは「その年こそ記録破りの人出であるこ

と」などという明治天皇とは全く関係ないことにしか関心を持っていないこと<sup>44</sup>。「降る雪や明治は遠くなりけり」<sup>45</sup>という俳人中村草田男の一句で、キーンは明治天皇とその時代がどんどん遠ざかっていく様子を表している。

#### 4.4 評伝『明治天皇』を考える

明治天皇という個人の軌跡を通して、当時の日本や世界がどのように動いていたのかを描写し、その流れが一人の人間の運命をいかに左右していったのかをたどる評伝『明治天皇』は、明治天皇という一人の人間についての具体的に詳細な史実と、天皇を取り巻く世界の大きな流れを同時にとらえている<sup>46</sup>。その中で、キーンは明治天皇の持っていた人間、政治機関、そして現人神という今まで伝記・論評で分断されがちだった三つの役割を統合した。

人間、政治機関、現人神という三つの側面を総括したキーンの強調する明治天皇は、英雄でもなければ悪者でもなく、歴史の動きに流されながら、日本が大国化するのを見届けていった、どちらかという平凡な君主である。明治天皇を英雄視する右翼にとって、評伝『明治天皇』は彼らのイメージとは異なるものを提供している。それが、明治天皇の「現人神」的な神格化された役割を求める右翼から脅迫に合うだろうとキーンが思った理由である。しかし、驚いたことに右翼は『明治天皇』を批判しなかった。その理由は明確ではないが、神格化された天皇を「神」からより人間に近づけたキーンの行いは、或いは21世紀の現在において、右翼が考える明治天皇のイメージと一致していたのかもしれない。それがどんなものであるのか、という問いに対して現段階では答えを持ち合わせていないが、歴史との繋がりを大切にしながら現代の日本社会という背景の中で、明治天皇及び明治という時代を改めて考え直すことによって、その答えに近づくことができるかもしれない。

#### 5. おわりにかえて——中国における明治天皇のイメージ

中国における明治天皇のイメージは二分している。一つは明治維新の成功そして日本の近代化と明治天皇を関連づけるイメージであり、日本を新しい時代へとリードした象徴として明治天皇を非常に高く評価している。この流れは康有為、梁啓超から続くものであり、現代でも『光緒皇帝vs明治天皇』など政治改革における光緒帝の失敗と明治天皇の成功を比較する本は出版され続けている<sup>47</sup>。もう一つのイメージは、日清、日露戦争を引き起こした侵略者、そして軍国主義の元凶として天皇を理解するものである。

しかし同時にこれは中国における明治天皇のイメージの局限を意味している。明治天皇という存在は、日本近代化の成功とは対照的な近代中国の政治的地位、政治改革の失敗、日清戦争の敗北、そして国家存亡に関わる数々の危機を映し出す鏡であり、その「鏡」とも言うべき天皇を通して中国を見つめ直すという目的のもとで構築された中国の明治天皇像は、「賢明なる君主」と「侵略者」という二つの顔しか持っていない。明治という時代とともに明治天皇を理解するためには、日本の中に近代化を求めることによって作り出された既存の明治天皇像だけでなく、さらに多様な明治天皇に関する認識を中国に引き入れなければならない。分断されていた明治天皇の側面を一つにつなぎ合わせ、総合的かつ立体的に明治天皇という人物のイメージを再構築し、新しい見解を見せてくれたキーンの評伝『明治天皇』は、中国における明治天皇像の「脱・ステレオタイプ化」のきっかけとなるかもしれない。

#### 注

- 1 『明治天皇』の連載が始まったのは1995年『新潮45』正月号。2000年4月号まで、連載は続く。単行本として『明治天皇』上下二巻が刊行されたのは、

- 翌2001年10月。
- 2 別冊太陽254『ドナルド・キーン日本の伝統文化を思う』（平凡社、2017年）pp.122-123。
  - 3 ドナルド・キーン『明治天皇を語る』（新潮新書、2003年）pp.5-6。
  - 4 ドナルド・キーン『明治天皇』第1巻（新潮社、2007年）p.23。
  - 5 ドナルド・キーン『明治天皇』第4巻（新潮社、2007年）p.410。
  - 6 ドナルド・キーン『明治天皇を語る』（新潮新書、2003年）p.16。
  - 7 ドナルド・キーン『明治天皇』第4巻（新潮社、2007年）p.347。
  - 8 ドナルド・キーン『明治天皇を語る』（新潮新書、2003年）p.17。
  - 9 同上。
  - 10 ドナルド・キーン『明治天皇』第1巻（新潮社、2007年）pp.19-20。
  - 11 同上、p.18。
  - 12 ドナルド・キーン『明治天皇を語る』（新潮新書、2003年）pp.20-21。
  - 13 A.B.ミッドフォード『英国外交官の見た幕末維新』（講談社、1998年）pp.127-129。
  - 14 同上。
  - 15 アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』下（岩波書店、1960年）pp.199-200。
  - 16 ドナルド・キーン『明治天皇』第2巻（新潮社、2007年）pp.462-463。
  - 17 同上。
  - 18 ドナルド・キーン『明治天皇』第1巻（新潮社、2007年）p.26。
  - 19 ドナルド・キーン『明治天皇』第4巻（新潮社、2007年）p.457。
  - 20 同上。
  - 21 同上、p.412。
  - 22 ドナルド・キーン『明治天皇』第1巻（新潮社、2007年）p.23。
  - 23 同上、pp.38-39
  - 24 ドナルド・キーン『明治天皇』第2巻（新潮社、2007年）p.98。
  - 25 ドナルド・キーン『明治天皇』第1巻（新潮社、2007年）p.467。
  - 26 ドナルド・キーン『明治天皇』第2巻（新潮社、2007年）p.102。
  - 27 ドナルド・キーン『明治天皇』第4巻（新潮社、2007年）pp.425-426。
  - 28 同上。
  - 29 ドナルド・キーン『明治天皇を語る』（新潮新書、2003年）p.184。
  - 30 同上、p.179。
  - 31 ドナルド・キーン『明治天皇』第4巻（新潮社、2007年）p.425。
  - 32 ドナルド・キーン『明治天皇を語る』（新潮新書、2003年）p.182。
  - 33 同上、p.171。
  - 34 同上、p.172。
  - 35 ドナルド・キーン『明治天皇』第3巻（新潮社、2007年）p.494。
  - 36 ドナルド・キーン『明治天皇』第4巻（新潮社、2007年）p.413。
  - 37 ドナルド・キーン『明治天皇』第2巻（新潮社、2007年）p.101。
  - 38 ドナルド・キーン『明治天皇』第1巻（新潮社、2007年）p.468。
  - 39 ドナルド・キーン『明治天皇』第4巻（新潮社、2007年）pp.383-384。
  - 40 同上、p.410。
  - 41 同上。
  - 42 同上。
  - 43 同上、p.411。
  - 44 同上。
  - 45 同上。
  - 46 同上、p.454。
  - 47 王日根『光緒皇帝vs明治天皇』（新星出版社、2006年）。
- 参考文献**
- ドナルド・キーン著『明治天皇』1-4巻 新潮社 2007年
- ドナルド・キーン著『明治天皇を語る』 新潮社2003年
- 別冊太陽254『ドナルド・キーン日本の伝統文化を思う』 平凡社、2017年
- A.B.ミッドフォード著『英国外交官の見た幕末維新』 講談社 1998年
- アーネスト・サトウ著『一外交官の見た明治維新』 上下 岩波書店 1960年
- 飛鳥井雅道著『明治大帝』 講談社 2002年
- 山口輝臣著『明治神宮の出現』 吉川弘文館 2005年
- 西川誠著『明治天皇の大日本帝国』 講談社 2011年
- 康有為著『日本変政考』 中国人民大学出版社 2011年
- 王日根著『光緒皇帝vs明治天皇』 新星出版社 2006年